湾岸タイムズ
ohsumi wangan times
¥0
TAKE FREE
第5号
かごしま一直線

特集

祖父が遺した約束の地

全国から集まったゼロ戦は大隅を経由して飛び立った

だから少女はその海をみない
初めて心を結びあった
背すじの　スラリとした青年の
若い生命が沈んでいる海
燃える火をかばいあって
愛することの喜びと
離れていく悲しさに　胸をひたし
ひき裂かれていった　その頃の青春
だから少女は　その海に行かない
戦いがすぎて
戦いを知らぬ　青年と少女が
裸でたわむれる　その海へ
海の底には青年の眸がある
水色のリボンで結んだ　少女の髪を
しっかりと胸の内ポケットに秘めて
国を守るのだと　沈んでいった青年の瞳が

「特攻」より　山下千江さん作

決6号作戦

昭和20年4月8日、つまり鈴木貫太郎内閣発足の翌日に「本土決戦の準備要綱」が示達され、本土決戦「決号作戦」に向けて動き出した。「決号作戦」は北海道から九州までの軍管区に対応して1号から6号に分けられており、米軍がどこに上陸するかで発動する作戦名が変わるはずであった。

ほとんどの予想では、九州南部（宮崎・志布志・吹上）の三正面同時上陸作戦が妥当な考え方で主戦闘地域は志布志湾沿岸と考えられていた。そのため、志布志湾岸には強力な地下壕要塞を構築し上陸作戦の波打ち際で50％せん滅、残りを陸軍でせん滅と考えていた節がある。

事実、予備部隊を国分・都城近辺に配置しており、戦車部隊も霧島の麓に待機していた。

残念ながら、昭和20年2月時点で海軍の海上戦力（機動部隊）は残っていなく、海上兵力再建を断念していた。

終戦時において戦艦（長門）1隻、軽巡洋艦1隻、駆逐艦17隻があったが動かすだけの燃料も乏しく、実質は震洋部隊が海軍船舶の特攻の主力であった。

日本軍の予想は的中していたのだが、誰が考えても、特攻の出陣拠点で本土最南端とくれば物量豊富な連合軍は三正面同時上陸作戦だろう。

志布志湾のみの作戦を取り上げてみても沖縄進攻の2倍から3倍で、第1波要員約5個師団で50万から60万人規模の作戦になったようだ。

防御陣営（日本）の人員からすると桁が違う。歴史に「もし」という言葉はないと言われるが、進攻作戦が予定されていた11月に決行されたとなると、九州南部は修羅場となっていたであろうことは想像に難くない。

一方、アメリカはコロネット作戦、オリンピック作戦と呼ばれるノルマンディー上陸作戦をはるかに上回る上陸作戦を計画していた。台風と雪を避けることで昭和20年11月1日を予定しており上陸作戦は目前に迫っていた。各決号作戦のうち、連合国軍がもっとも上陸する可能性が高かったのは、決3号（関東）と決6号（九州）で決号作戦準備要項の中でも「…主戦面は太平洋及東支那海正面とし、戦備の重点を関東地方及び九州地方に保持す」とされ、2方面に重点が置かれた。また、「決号作戦」として、本土決戦における最終挙軍特攻作戦も準備された。

その激動の時代から60余年。戦いの記憶が忘却の彼方へ押しやられようとしている今、大地にたたずむ戦跡をめぐり、命をかけて戦った人の想いと、平和への祈りを受けとめたい。

特攻出撃した戦死者数が最も多かった海軍鹿屋基地。

九州で特攻基地というと「知覧」を思い浮かべるのですが、南九州には鹿屋基地を筆頭に多くの特攻基地が存在していました。なかでも特攻出撃戦死者数を比較すると、最も多い基地が海軍の鹿屋基地で908名、次いで陸軍の知覧基地が436名、海軍の国分基地が3番目に427名、続いて宮崎の赤江基地、海軍の串良基地、陸軍の万世基地、海軍の出水基地、海軍の指宿基地、陸軍の都城基地と続き、戦局での重要な場所だと推察できます。当時、空軍はありませんでした。もし、8月15日に終戦にならなかったら、南九州は間違いなく激戦地の一つとして数えられていたでしょう。防御陣地を築城したものの砲弾の備蓄もなく、食糧事情からも悲惨な状況になっていたことと思われます。特攻出撃した航空機の数は膨大ですが、当時このような航空戦力を南九州で持っていたのではなく、日本全国各地から動員された飛行機が飛び立っていった場所なのです。

第86師団積兵団 芳仲師団長が「戦争に負けても日本（神州）は亡びない」として「神州不滅」の碑石を将兵相携えて建立。

鹿屋海軍航空隊基地

戦局が悪化し本土決戦に備えた1945年鹿屋基地には陸海軍の全航空部隊を統合する第五航空艦隊司令部が設置された。沖縄決戦では神風特別攻撃隊の作戦の中心地となり、日本で最も多い70部隊711機が出撃した。当時の庁舎を現在もそのまま使用しており弾痕などが生々しく当時を伝える。当時鹿屋には、国鉄大隅線を引き込んで物資を運び込み、海軍航空廠が併設され、基地の外には航空廠の分工場が多数存在した。

現在は海上自衛隊鹿屋航空基地として第一航空群などの6部隊、1700名が勤務する。

左は、アメリカ海軍ニュース「NavalAviationNews」に掲載されていた内容で、当時連合軍は拠点をほとんど把握していたことが明確にわかる。また、Kyushuの地図もあり、航空拠点の位置も完全に把握されていたようだ。鹿屋航空基地内には掩体壕や地下壕入口が残っており、零式艦上戦闘機などを隠していた。

アメリカ海軍ニュース／1945年8月15日号掲載の鹿屋海軍基地の航空写真（1945年当時のバックナンバーが閲覧できます。
http://www.history.navy.mil/nan/backissues/1940s/1945/backissues1945.htm

笠野原海軍航空隊基地

旧笠之原飛行場として、大正11年8月から24年間にわたり、旧陸海軍の飛行場基地として使用されていた。太平洋戦争末期の昭和19年1月15日には海軍航空基地が設置され、田中隊1個中隊が常駐することとなった。また、昭和20年1月には第203航空隊零式戦闘機72機が配備され、神風特別攻撃隊として南海の戦場に散っていった。その後昭和20年3月18日の連合軍の集中爆撃のため、格納庫を始めとする基地施設は全滅し、当時を物語る唯一の遺物として、このコンクリート入口が、東西に走っていた滑走路へ通ずる地下道入口並びに地下通路司令室として現存している。

「掩体壕」とは、軍用機を敵の空襲から守るための格納庫でした。

滑走路に続く地下通路及び地下通信指令室入口

笠之原付近には、畑の中の掩体壕も残っており、当時を知る土地の所有者は掩体壕にはゼロ戦が格納してあったと言い、戦後、鉄をとるために破壊しようとしたがビクともしなかったと言う。また、近くには弾薬庫跡もあり、壁には今でも生々しい弾痕が残っている。

「TERRAIN STUDY No.130, SE. KYUSHU（地形研究南東九州編）」掲載の航空写真解析図

左の資料は「TERRAIN STUDY No.130, SE. KYUSHU（地形研究南東九州編）」という冊子で、当時、オーストラリアのブリスベンに本部があった連合国地誌部が作成したものです。連合国地誌部というのは、地理学的な見地から諜報を行う部門なので、アジア・太平洋地域での軍事作戦（空爆・占領戦）の必要上、作成されたものだと判断できます。第1巻は「ラバウル」で、日本は130巻「南東九州」1945年5月31日、132巻「東京・関東平野」1945年5月30日、134巻「名古屋エリア」1945年6月15日、136巻「大阪（近畿）」1945年8月11日の4巻が確認されています。日本本土の進攻作戦を想定していたのか、このシリーズの先頭にくるのがこの南東九州編ということで、上陸に必要な海岸の状況など細かく調査されています。他にも「Terrain Handbook Kanoya, Miyaazaki, Kagoshima」もそれぞれある。

串良海軍航空隊基地

串良海軍航空隊は、第二次世界大戦末期に教育航空隊として開隊され、約５０００人の飛行予科練習生が航空機の整備・搭乗・通信等の猛特訓を受けたところである。昭和19年４月１日には、実戦部隊に編入され、本土決戦に備え串良海軍航空基地の整備が進められた。昭和20年３月１日からは、特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に串良海軍航空隊からは第一・第二・第三護皇白鷺隊、徳島第一・徳島第二・徳島第三・徳島第四・徳島第五白菊隊などの特別攻撃隊員363名が出撃している。

現在は串良海軍航空基地地下壕電信司令室が個人宅の敷地内に残されている。有名な護皇白鷺隊や徳島の白菊隊などの機上の特攻隊員と通信し出撃等の命令を発信し、また特攻隊の最後の電信の途絶を確認した地下電信司令室壕である。

串良海軍航空基地地下壕電信司令室内部

すぐ近くには畑の中にさらに大きなコンクリート製の地下壕入口があり、電信司令室の壕のサイズから考えるとかなり大きくコンクリートの厚さもかなりのものである。

付近には大塚山展望所があるが、ここにも大塚山砲台陣地が築城されており山をくり抜いて志布志湾が見渡せる位置に銃眼があったと言われている。

日本の茶道流派の裏千家の前家元15代千宗室（大正12年生まれ、現在、千玄室）さんは昭和18年、学徒出陣により同志社大学在学中に召集を受け海軍予備学生として海軍に入営、舞鶴の海兵団から土浦海軍航空隊、徳島海軍航空隊を経て海軍少尉に任官し、昭和20年、特別攻撃隊に志願し串良海軍基地に移動した。

テレビドラマ「水戸黄門」で第14部から第21部までの９年間に渡り水戸光圀役を演じた俳優の西村晃さんも日本大学在学中に召集を受け舞鶴海兵団で年上の千玄室さんと出会い、徳島海軍航空隊の同じ隊で訓練をし、串良海軍基地に移動した。

戦況がどんどん悪化するなか仲間たちは次々と出撃命令を受け、西村晃さんにも命令が下るが千玄室さんには命令が無く、終戦直前に松山基地に転属し甲種予科練習生（７つボタンの少年兵）の教育をしながら待機命令のまま終戦を迎える。二人はお互い出撃により既に亡くなったものと思っていた。

終戦後昭和21年東京で偶然再会を果たすことになるが、西村晃さんは出撃したが機体故障の為引き返し、千玄室さんは出撃することがなかった、二人がいた隊では、この二人だけが生還した。

この隊が徳島から串良海軍基地に移動する日、飛行訓練後に自分たちが乗る飛行機の機体の傍らで手持ちの道具と配給の羊羹で５人の隊員全員と茶会を催した逸話は広く知られている。

戦後、千玄室さんが「一椀のお茶で世界平和を」と茶道を通じての平和活動をされているのも頷けます。

垂水海軍航空隊基地

昭和19年２月、普通科雷爆練習生教育航空隊として開隊、鹿屋海軍航空基地と連携して、91式航空魚雷の整備教育を行っていた。普通科雷爆練習生約800名、甲種飛行予科練習生約600名が卒業して戦地に向かっていった。昭和20年６月、いよいよ本土決戦が近くなると第61震洋隊が配備されて飛行機のない海軍航空隊のひとつになった。

桜島牛根海軍航空隊基地

愛知16試水偵「瑞雲」水上偵察機、第634海軍飛行隊は沖縄防衛に向けて昭和20年６月に出撃、その飛行機の形からもわかるように、滑走路ではなく海を滑走路として活用する飛行機の基地があった。鹿児島県には、指宿・鹿児島・古仁屋（奄美）とこの種類の基地があるが玄海秘匿基地が第634海軍航空隊本部訓練基地として開隊するのにあわせて桜島牛根にも前線攻撃基地として桜島牛根秘匿基地が設置された。

日本海軍は戦艦や巡洋艦に載せてカタパルトから発進する水上機の開発に熱心で、多くの水上偵察機を開発していたが、実際、空母を運用する時代になっても、南の島に橋頭堡を確保した後地上軍を守備するために滑走路がなくても活躍できるので重宝された。また、下駄を履いている（フロートが２個付いている様子）のに性能が良かった。

第634海軍航空桜島夜間前線基地
（写真は垂水市松ヶ崎公民館提供）

桜島海軍基地 第五特攻戦隊司令部

昭和20年４月から７月にかけて、佐世保鎮守府部隊の第四海上護衛隊を改編して、第五特攻戦隊（駒沢克己少将）を編成した。桜島海軍基地は司令部になり、第35突撃隊（細島）・第33突撃隊（油津）・第32突撃隊（鹿児島）を編成した。第五特攻戦隊には、蛇龍・海蛇24隻、回天46隻、震洋725隻（昭和20年７月末）在籍していた。

魚雷などの武器・弾薬なども貯蔵してあったようで山全体が施設ではないかと思われるくらい奥が深い。

発祥の地

幕末、西欧列強が東アジアに進出してきた時代に、島津家28代当主島津斉彬は「海から来る敵は海で防ぐべき」と考え、洋式帆船を建造しました。

嘉永６年、桜島の瀬戸に造船所を設けて大型船の建造に着手、安政元年12月に竣工し「昇平丸」と命名しました。更に15隻の建造を計画して、その中の鳳瑞丸・万年丸が垂水市牛根で、大元丸・承天丸が桜島の有村で建造され、次々に洋式帆船が竣工されました。

薩摩藩をはじめ日本各地で洋式帆船が建造されるようになって、日本の船の印が必要となり、斉彬が提案したのが「白地に朱丸一つ」の日の丸です。これが幕府に受け入れられ、日本の総船印となり、後に国旗になりました。そして、はじめて日本を示す旗として、昇平丸に掲げられたといいます。

現在の垂水市牛根麓の造船所跡地近くには名残の山下造船所があります。釘や鉄片を造った牛根麓の鍛冶場の跡からは、今も多数の鉄くずが出るといいます。

「君が代」は、古今集にある歌からとったものですが、薩摩では古くから「サムライ踊り」や「薩摩琵琶」などの歌詞に使われてきました。明治２年、鹿児島湾に停泊していたイギリスの軍艦から聞こえる軍楽隊の音楽に薩摩藩主、島津久光が感銘を受け、薩摩藩に軍楽隊を作ることを決意したことから、日本の吹奏楽の歴史がはじまります。薩摩藩は、指導をイギリス軍に要請。そして、横浜に駐留していたイギリス第十連隊第一大隊のジョン・ウィリアム・フェントン軍楽長のもとに藩士32名を「薩摩藩洋楽伝習生」として横浜に派遣しました。これがきっかけとなり、大山巌など薩摩人が歌詞を提示してフェントンが作曲したのが日本最初の「君が代」です。後に、明治13年楽曲改定があり、現在の「君が代」の曲となりました。

「国旗日の丸のふるさと」記念碑
鹿児島県垂水市牛根麓

世界三大マーチ行進曲として、軍艦行進曲(Imperial Japanese Navy)、旧友(Alte Kameraden)、星条旗よ永遠なれ(The Stars And Stripes Forever)とあるが軍艦行進曲は明治時代に垂水市出身の瀬戸口藤吉さんが作曲、垂水市下宮公園内に記念碑があります。

桜島海軍基地での物語は、梅崎春夫が戦後派作家としての出世作「桜島」を、米軍上陸に備える桜島への転勤が決まった暗号特技員の村上兵曹の人生という形で、自分の海軍体験を踏まえて発表、溶岩なぎさ公園に梅崎春生「桜島」文学碑があります。

時の彼方に薄れゆく「戦争」を知る旅。

60余年前、愛する人を守り、国を守るため、この大隅の地から多くの若者が大空へ飛び立ち、散った。半世紀余りが過ぎたいま、大地の中にたたずむ戦跡は風化の道をたどり、戦争の事実さえも人々の記憶から消え去ろうとしている。先人たちが全身全霊をかけて築いた平和の尊さが人々の心から薄れゆくいま、戦争の痕跡を訪ね、ふたたび平和の意味を後世に語り継ぎたい。

1 桜島 海軍基地 ～第五特攻戦隊司令部（鹿児島市桜島）

1945年4月から7月にかけて桜島海軍基地は第五特攻戦隊司令部になり、桜島は魚雷や回天などの武器、弾薬を貯蔵する一つの大きな要塞になった。作家梅崎春夫の出世作「桜島」は、自らの桜島における海軍体験をもとに書かれた小説である。

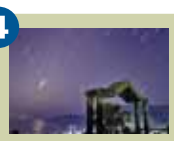
2 串良海軍航空基地地下壕電信司令室（鹿屋市串良町）

太平洋大戦末期、教育航空隊として開隊された串良海軍航空隊では、約5000人の飛行予科練習生が航空機の搭乗・通信等の特訓を受けた。昭和20年3月1日、特攻隊の基地となり、終戦までの半年間に363名が出撃。

3 海軍笠野原航空基地（鹿屋市）

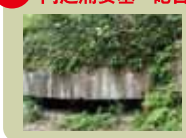
大正11年から終戦までの24年間、旧陸海空軍の飛行場基地として使用された。戦争末期には海軍航空基地が設置され、神風特攻隊の基地になった。昭和20年3月18日、連合軍の集中爆撃を受けて施設は全滅。この入り口が唯一の遺物である。

4 叶岳ふれあいの森（肝付町内之浦）



内之浦地区のほぼ中央にある「叶岳ふれあいの森」。555段の階段を登りきると内之浦湾、国見連山など一望する絶景が広がっている。

5 内之浦要塞～砲台・トーチカ（肝付町内之浦）



沖縄戦後の本土決戦の第一候補地に志布志湾岸が想定され、迎撃のための軍事施設が志布志湾両岸に構築された。海蔵集落のある半島一帯はとくに戦略的価値が認められ、今も6カ所の砲台・4カ所のトーチカ跡が残っている。

6 権現山（肝付町高山）

肝属川河口の波見交差点より山手へ入る。駐車場から登山道を10分ほど上がった山頂からは、柏原海岸から志布志湾へかけて一望できる。

7 大塚山砲台陣地（鹿屋市串良町）

展望台から360度の大パノラマを楽しめます。ここにも大塚山砲台陣地が築城されており山をくり抜いて志布志湾が見渡せる位置に銃眼があったと言われています。

写真は大崎町四季の森トーチカ陣地跡

まだまだ、このエリアには忘れ去られた歴史の遺物が多く残っている。

8 第86師団（志布志市松山）

昭和19年、留守第56師団を基幹に久留米で編成。当初は西部軍の指揮下にあったが、翌年、新設された第57軍戦闘序列に編入。志布志湾沿岸配備師団が防備する中で出撃する機動打撃師団として本土決戦に備えた。

9 岩川海軍航空隊基地 通信司令部壕跡（曽於市岩川）

戦局が激化した1945年、静岡県藤枝海軍航空基地（現航空自衛隊静浜基地）より「芙蓉部隊」と呼ばれる航空隊が岩川に着任。周辺のカモフラージュ（偽装）によって、大切な航空機を最後まで守り抜いた。

10 岩川海軍航空隊基地 発電所用壕跡（曽於市岩川）

公民館近くを散策すると、旧国鉄大隅線の跡がしのばれるものも多く、国鉄が基地建設、物資輸送に活躍していたことがうかがえる。通信司令壕から直線で数百mの県道沿いには発電所壕があり、内部を見学できる。

11 芙蓉之塔（曽於市岩川）

太平洋戦争末期における日本海軍第131航空隊所属の3個飛行隊の通称であった。美濃部正少佐の下で独立運用され、特攻が主体となっていた当時の海軍航空隊にあって、独自の夜襲戦法によって活躍した。

12 ダグリ岬自然公園（志布志市）

志布志湾と太平洋を望む岬には現在、亜熱帯の植物が茂り、白砂青松の海水浴場、遊園地などが整備され、平和な風景を見せている。

13 都井岬（宮崎県串間市）

志布志湾の北端の切っ先に位置する岬は、根元がくびれた半島のような形で太平洋に突き出し、山頂からは一帯の地形が一望できる。

鹿屋海軍航空カレー（ビーフ・ポーク）

旧海軍といえば、海週金曜日カレーを食べることが伝統でした。その海軍伝統の味を今に再現するために鹿屋海上自衛隊の協力のもと開発した商品です。ポークには鹿児島産黒豚を使用しています。安心・安全な地域ブランド商品として認定され、マイルドでレトロな味はお子様を始め誰にでも愛される美味しいカレーとして喜ばれています。平成22年「大隅地域特産品コンクール」入賞。

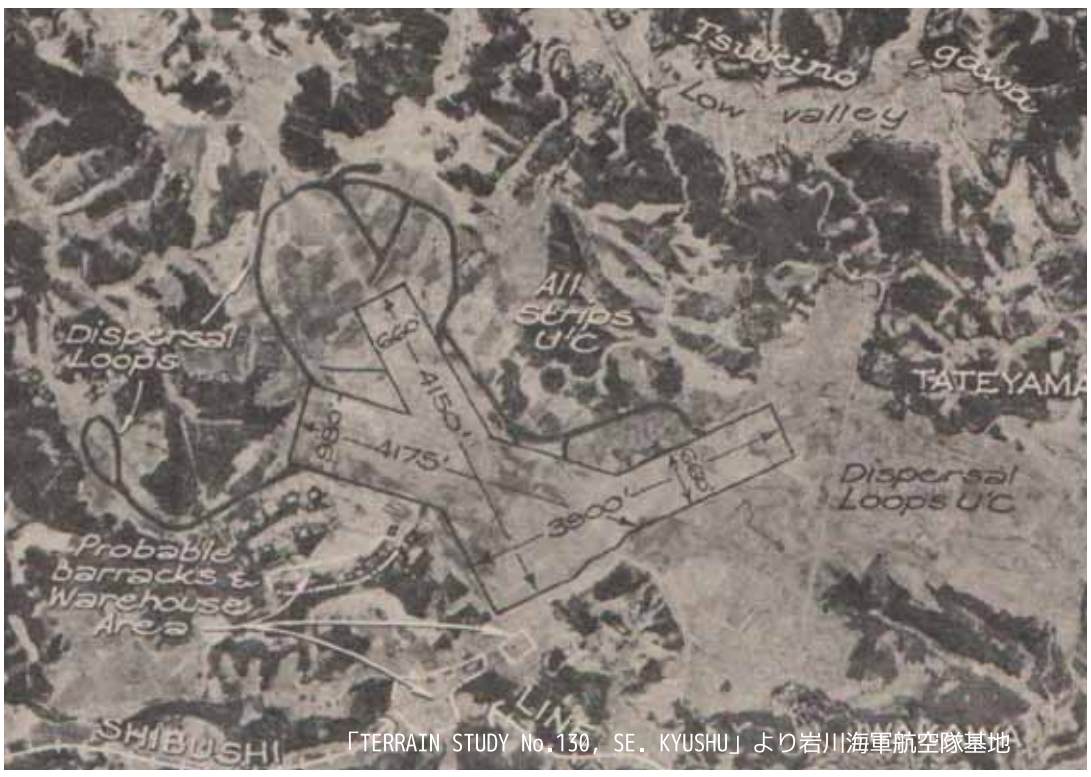
鹿屋航空基地史料館

鹿屋市にある海上自衛隊鹿屋航空基地の一角の史料館２階に旧海軍航空隊関連が展示されています。２階にある零式艦上戦闘機は垂水と吹上浜で引き上げられたゼロ戦から復元されたものです。太平洋戦争末期の１９４５年３月１１日、第７６２航空隊の海軍陸上爆撃機「銀河」（中島飛行機製）２４機が鹿屋を飛び立ちました。鹿児島市鴨池海軍基地を出撃した二式飛行艇と佐多岬上空で会合しウルシー環礁に向かいました。この出撃が最初の神風特別攻撃隊菊水部隊梓隊（通称：梓特別攻撃隊）です。以降終戦まで南九州から多くの航空機が出撃しました。屋外には、世界で唯一現存する二式飛行艇が展示してあります。

鹿児島県鹿屋市西原3丁目11−2
TEL.0994−42−0233
開館時間／9:00～17:00（入館16:30）
入 館 料／無 料

岩川海軍航空隊基地

鹿屋海軍航空基地が第五航空艦隊司令部がおかれ活発に活動するにつれ、九州南部の空襲も激しくなっていた。昭和20年5月、静岡県の藤枝海軍航空基地（現、航空自衛隊静浜基地）を本拠地にしていた第131航空隊（芙蓉部隊）が大隅半島内で不時着用に使われていた岩川基地に展開した。鹿屋の北東に位置する岩川は山林と農地が主という場所で、広大な敷地の1/10程度を飛行場とした。指揮官が始めから秘匿飛行場として運用するつもりだったようで、滑走路は芝生地で、滑走で土が露出したう部分は樹木や草で偽装し、移動式の家屋を設置したり牛を放牧するなどの工夫をこらした運用が行われた。その結果、終戦に濃いたるまで米軍に発見されることがなかったという。この基地てを運用していた部隊はこの頃より「芙蓉部隊」と呼ばれ、昭和持20年初めに激戦のフィリピンか飛ら帰還した第901飛行隊、第804飛地行隊、第812飛行隊の3個飛行隊に が第131飛行隊に編成しなおされ底て出来上がった部隊で、夜間戦貴闘機隊として編成されていた。当この部隊は、「彗星」と「零航戦」を使って夜間通常攻撃を行うことを目的としており、実質は第五航空艦隊司令部所属ではなく第三航空艦隊司令部の指揮下で戦闘していた。指揮官の美濃部正少佐は、夜間戦闘を唱えており、芙蓉部隊は特攻隊として体当たり攻撃を行わなかった。当初から二段階基地構想を持っており、静浜飛行場で夜間飛行訓練をし、バックアップ基地として隊員の錬度向上と休養に活用した。また、飛行場は徹底的なカムフラージュを施し、貴重な航空機温存に努力した。当時、余分に配分されるような航空機はなく、美濃部正少佐は艦上爆撃機として生産されながら、故障が多くて全国に放置されていた水冷式「彗星」に着目し、全国からかき集め再生しながら戦力を確保した。戦力不足に苦慮する部隊が多い中、美濃部の隊だけが航空機の稼働率も80％～90％であり隊員の士気も高かった。



「TERRAIN STUDY No.130, SE. KYUSHU」より岩川海軍航空隊基地

公民館近くを徒歩で散策すると、旧国鉄大隅線の跡も多く、国鉄が基地建設、物資輸送に活躍していたことが伺える。通信司令壕から直線数百ｍの県道沿いには、発電所壕があり、こちらは中を見学させてもらえる。当時の航空写真をみるとこの岩川海軍航空隊基地だけが確認することができない。指揮官が虎の子の航空機を敵にさらすのを嫌ったためでカモフラージュ（偽装）に余念がなかったと思われる。

現在は、「志布志市松山町西馬場3区公民館」の敷地地下にある【通信司令部壕】

公民館の敷地を囲むように6カ所にコンクリート製の入口が見られる。相当な厚さで当時の爆撃にも耐えられる仕様だ。現在は、土砂で埋められており中をのぞくことはできない。

地下壕入口

曽於市岩川平田さん所有地の地下にある【発電所用壕】

海軍飛行隊の美濃部正少佐は、特攻による戦果の低調なるを進言し、夜襲部隊編成を認めてもらい芙蓉部隊が結成される。

第三航空艦隊における会議に美濃部が参加した際に、艦隊司令部が練習機で特攻をやらせる案を提示したため、末席の美濃部は練習機では敵戦闘機の防御網を突破できないと反論した。すると司令部参謀は『必死尽忠の士の進撃を何者がこれをさえぎるか、第一線の少壮士官が何を言う』と叱責するが、美濃部は『現場の兵士は誰も死を恐れていません。ただ、指揮官には死に場所に相応しい戦果を与える義務があります。練習機で特攻しても十重二十重と待ち受けるグラマンに撃墜され、戦果をあげることが出来ないのは明白です。白菊や練習機による特攻を推進なさるなら、ここにいらっしゃる方々が、それに乗って攻撃してみるといいでしょう。私が零戦一機で全部、撃ち落として見せます』と言った。この反対論を述べた際、美濃部は死刑に処せられることを覚悟していた。

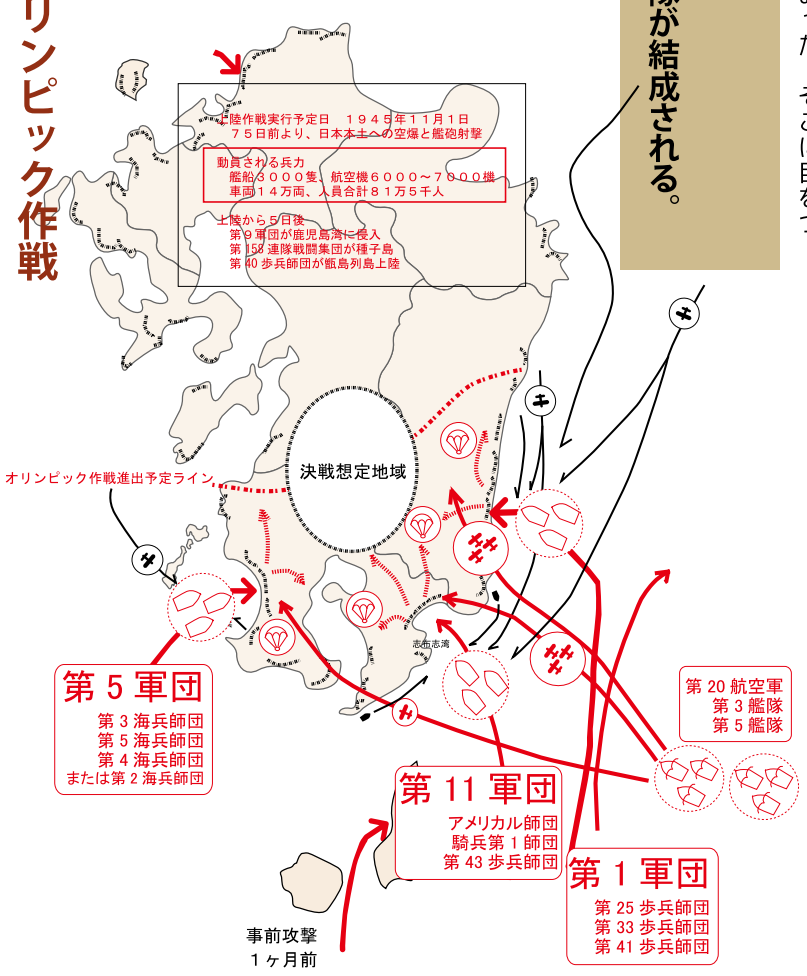
単発複座の高速艦上爆撃機「彗星」は、岩川の海軍航空基地で零式艦上戦闘機と共に芙蓉隊で使用された。

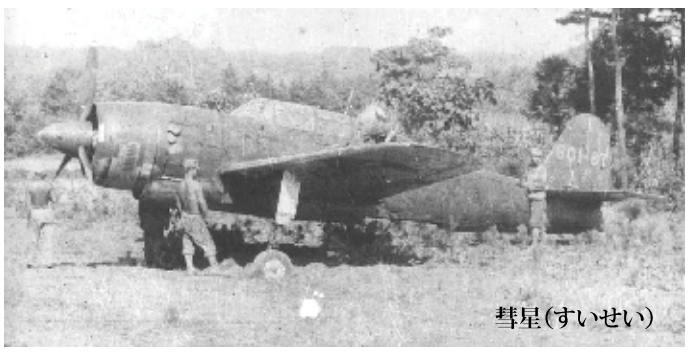
当時、国内は物資がひっ迫し、熟練した整備技術者も少なくなっておりドイツから技術供与を受けて開発された水冷エンジンの整備は当時の整備環境では困難であった。そこに目をつけた美濃部隊長は、各地の飛行基地に眠っていた機材をかき集めて、優秀な整備兵を自隊で教育し、豊富な予備部品と航空基地での機体の偽装などの努力で、飛行機の稼働率8割以上を達成していた。

当時としては斬新なバックアップ態勢を取る形で静岡の基地と岩川の基地が運用されていた。

「彗星」は夜間戦闘機として分類されることもあるが、本来は航空母艦に艦載する爆撃機として開発されていた。

オリンピック作戦




彗星（すいせい）

大隅半島各地の飛行場を守るために決号作戦に備えて構築された陸軍の要塞。

内之浦臨時要塞（高崎・海蔵地区）

決戦前後の、決6号作戦（本土決戦）は、志布志湾を第一候補地に想定し、昭和19年8月から志布志湾の沿岸に迎撃のため軍事施設が構築され始めた。

海蔵集落（内之浦）のある半島一帯は戦略的価値が高いと認められ、志布志湾岸で最も大きい要塞が構築された。そのため、砲台跡6ヶ所（7門の高射砲）・弾薬庫1ヶ所・探照灯1ヶ所（飯ヶ谷）の遺跡が残っている。2連式のトーチカ（機関銃座）の他に、海蔵岬他2ヶ所が現存している。当時は、もう1ヶ所あったことが確認されていることから、トーチカは全部で4ヶ所で機関銃座は5つであったと考えられる。このトーチカは波見（硯石）近くにも1ヶ所あったといわれている。

内之浦臨時要塞の構築は、豊予要塞司令官を長とする有明作業隊を編成、歩兵1個大隊、重砲兵4個中隊、工兵1個大隊、自動車1個中隊からなり、高崎、枇榔島（ビロウジマ）、鬚垂島（ビンダレジマ）に臨時砲台等を構築することになった。これより小規模ではあるが、南大隅町佐多伊座敷にもここを構築した部隊が陣地構築に向かった。もちろん、終戦まで実戦がなかったのは不幸中の幸いであった。

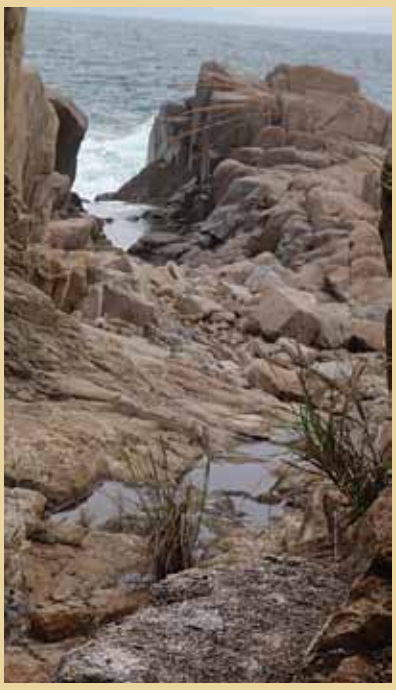
この写真は九州南部志布志湾岸の砲台陣地の写真とされ、内之浦砲台付近の様子だろうと言われている。撮影は陸軍参謀本部の対外宣伝グラフ誌『FRONT』の写真部員だった菊池俊吉。この写真雑誌は昭和17年から昭和20年にかけて東方社から発行されたが、日本国外の地域や民族に対して、日本の国威・軍事力・思想等を誇示するのが狙いで最大15ヶ国語で翻訳され陸海軍と政府の全面協力で出版されていた。

震洋特攻艇基地は、火出ヶ崎・内之浦浜・小白木浜にあったという。

内之浦臨時要塞に始まる大隅半島の拠点陣地は、志布志湾上陸地点を死守するために鬚垂島守備隊（串間）、枇榔島守備隊（志布志）、波見砲兵陣地、猜ヶ宇都陣地（大崎）、金丸陣地（大崎）、崎園陣地（大崎）、大塚山陣地（鹿屋市串良）と配置され、錦江湾岸からの上陸を阻止するために大隅半島錦江湾沿岸部に高須地区隊の坂元砲台、大根占地区隊の長谷砲台、伊座敷地区隊の伊座敷砲台・立目崎砲台が配置された。

「かごしまの戦跡を探る会」の八巻聡さんが発表した「鹿児島県の戦争遺跡本土決戦編①」（平成17年発行）によると伊座敷砲台、立目崎砲台は未だ従来の姿を残しているとあり、そこからの錦江湾の見晴らしも良く、鹿児島湾口を閉塞し水際で撃滅するには最適の配置と考えられた。

内之浦臨時要塞は昭和19年9月に豊予要塞の砲兵連隊を中心に有明作業隊を編成し築城し昭和20年3月に完成した。昭和20年3月に独立混成第98旅団の編成が完了すると、旅団基幹は大根占・伊座敷付近に転進することになるが終戦末期まで計画変更や装備未着などにより完成はできなかった。立目崎砲台・内之浦臨時要塞観測所写真は八巻聡さん提供。



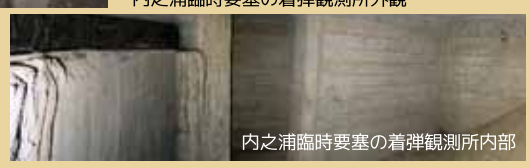
回天発射基地跡（海軍）

内之浦砲台跡（公園横）

海蔵地区２連トーチカ外観

２連トーチカ内部

内之浦臨時要塞の着弾観測所外観



内之浦臨時要塞の着弾観測所内部

立目崎砲台の外観

立目崎砲台の内部

立目崎砲台から望む開聞岳

糸川英夫銅像　鹿児島県肝付町（内之浦）

右の写真は、鹿児島県肝付町（内之浦）にある糸川英夫（大正元年7月20日-平成11年2月21日）の銅像。日本の国産ロケットのパイオニアでペンシルロケットの開発者。「日本の宇宙開発・ロケット開発の父」と呼ばれている。

昭和15年、東京帝国大学工学部航空学科を卒業し、中島飛行機に入社。実はここで帝国陸軍の飛行機の設計に携わり97式戦闘機、一式戦闘機「隼」、二式単座戦闘機「鍾馗」などの設計に関わった。

一式戦闘機「隼」は、陸軍に昭和16年制式採用されたが、太平洋戦争における主力機として使用され、海軍の「零戦」と並び陸海軍を代表する航空機だった。知覧陸軍航空基地からも特攻機として多く飛び立つ。総生産機数は5700機以上で海軍の零戦に次いで2番目に多かった。

エンジニアの養成が急務と感じた陸軍は、糸川を東大助教授に就任させ、エンジニア養成とミサイル誘導弾の研究をさせた。そして、太平洋戦争が始まる。糸川は、ミサイルが開発できれば必ず日本は米国に勝てると信じミサイルの開発に夢中になる。しかしその甲斐もなく、日本は敗戦を迎える。

終戦後さまざまな転機を経て、日本におけるロケットの第一人者になった糸川の一声で内之浦にロケット発射場の設置が決まったと言われる。

昭和45年2月、5回目の挑戦でついに日本初の人工衛星「おおすみ」の打ち上げに成功する。だがそれに糸川が直接携わることはなかった。平成15年5月9日、小惑星を探査する探査機「はやぶさ」が打ち上げられた。当初目指した小惑星は、パロマ天文台が発見した小惑星だった。糸川の意思を継いだ者たちは、パロマ天文台に対して、この小惑星に「イトカワ」という名前を登録してほしいとお願いしていた。糸川の功績を知っているパロマ天文台の発見者も快諾していた。ところが、打ち上げが延期されたことで、目指す小惑星が変更されることになった。糸川の弟子たちは、あわてて、変更された小惑星の発見者であるマサチューセッツ工科大学の研究チームに、こちらを「イトカワ」と命名してほしいとお願いすることになった。もちろん、快諾されたし、いったん頼まれてキャンセルされたパロマ天文台も文句ひとつ言わなかった。

こうして、糸川が空力設計を行った戦闘機と同じ名前の探査機「はやぶさ」が、小惑星「イトカワ」を探査することになったのだ。

志布志洞窟陣地

右写真手前が権現島（志布志）、以前は島であったが、現在は埋め立てにより陸続きになって山になっている。ここもかつては要塞化されていたことに驚く。志布志市街には、歩兵187連隊第3大隊の深見大隊が総延長16kmに及ぶ洞窟陣地を構築していた。深見大隊の他、速射連隊、野砲連隊も集結していたので終戦当時は数千人が志布志に駐屯していた。この陣地は、昭和20年6月に九州全般の防備状況を視察した第二総軍司令官畑元帥が全軍一のモデルだと絶賛したそうだ。

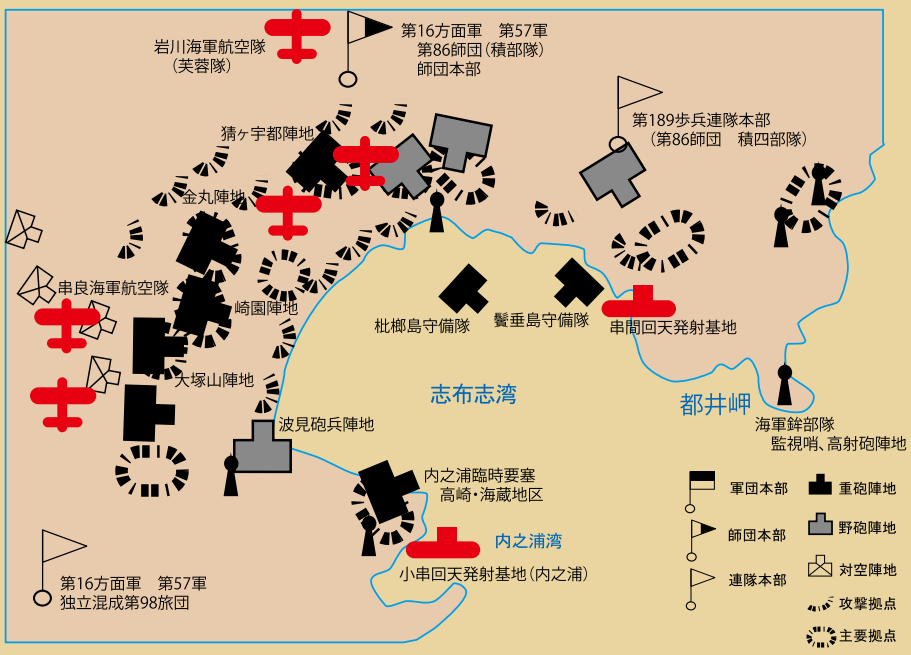
さらに海上に浮かぶ枇榔島（ビロウジマ）という無人島があるが、この亜熱帯樹に覆われた島も硬い岩盤をくり抜いて地下要塞が築かれ12cm加農砲が志布志の町に向かって据え付けられていた。同じように串間市の目の前の鬚垂島（ビンダレジマ）にも同様に10cm加農砲が2門据え付けられていた。二つの無人島に共通するのは未だ人の手が加わっておらず当時の様子を残していることだ。

写真上は、終戦前の権現島から志布志湾の海岸を見渡す風景、当時の連合軍の調査資料には上陸する位置などが細かく検討されていた。写真右にはローマ字で航空写真に説明が加えられているが、菱田や押切、志布志などの地名や国鉄の線路や地形の説明などを細かく記載している。

志布志湾岸の砲台陣地

左図は、終戦当時の志布志湾岸における砲台陣地（海岸線は10km ごとに砲台が構築され榴弾砲と加農砲で陣地が構築されていた。）などの部隊配置図である。大隅半島に張り巡らされていた鉄道網は基地の中に大砲や砲弾などの重量物を運び込めるように、さらに細かく支線が敷設してあった。

大塚山陣地を始めとする猜ヶ宇都陣地、金丸陣地、崎園陣地などの平野部へ少し入った見通しのいい低山には対戦車や海岸線防御を主目的として、艦船からの砲撃や空爆などにも耐えられるように洞窟を掘削してコンクリートなどで一部補強した陣地の構築がなされていた。他にもコンクリート製のトーチカや塹壕や着弾観測所などが平野部の小高い丘には散在していた。



大崎町「四季の森」の山頂付近には、未だ当時のままの様子で山頂部に複数のトーチカが存在する。トーチカ後背部は山をくり抜き、そのまま裏山の裾野に向けて塹壕が残っている。

大崎町西井俣にも高射砲陣地が布陣しており、地下トンネルや塹壕で各陣地がつながっていた。

戦後も塹壕には弾薬が落ちていて子どもたちが暴発事故にあったりしていたという。今ではほとんどの塹壕や防空壕の入口が危険防止のため閉鎖してある。

大塚山展望所（鹿屋市串良）、四季の森（大崎町）、権現山（肝付町）、陣岳国際の森（志布志市）などから見渡すと当時の様子を想像できる。

戦後多くの人たちが、この地での出来事を書籍にして残してくださっています。戦後60余年で、その書籍もほとんど販売されていないことが残念である。

参考図書

戦史叢書「本土決戦準備(2)」、歴史群像60「本土決戦」学研、「従軍記」安部元、終戦秘録「九州8月15日」上野文雄、「かごしま戦争遺跡記憶の証人」南日本新聞社、ほか

*内之浦臨時要塞　高崎・海蔵地区
　重砲兵第15連隊　第3大隊
　七年式十五糎加農砲　7門
　十糎加農砲　2門
*波見砲兵陣地（肝付町）
　重砲兵第15連隊　独立野砲中隊
　三十八式野砲　8門
*枇榔島守備隊（志布志）
　重砲兵第15連隊　独立10加小隊
　92式十糎加農砲　1個小隊
*鬚垂島守備隊（串間）
　重砲兵第15連隊　十二速加小隊
　十二糎速射加農砲　2門

*猜ヶ宇都陣地（志布志市有明）
　重砲兵第15連隊　第2大隊
　二十八糎留弾砲　6門
*金丸陣地（大崎町）
　重砲兵第15連隊　第1大隊
　二十四糎留弾砲　4門
*崎園陣地（大崎町）
　重砲兵第15連隊　第2大隊
　二十八糎留弾砲　6門
*大塚山陣地（鹿屋市串良）
　重砲兵第15連隊　第1大隊
　十五糎留弾砲（対戦車砲）
　二十八糎留弾砲　2門

大崎町「四季の森」山頂付近

崎園陣地（大崎町）の内部

崎園陣地（大崎町）の外観

崎園陣地（大崎町）から望む

２０１３年１２月映画公開決定

永遠の0（ゼロ）

時は太平洋戦争。たった一機の戦闘機が、アメリカ海軍を震撼させた。
零戦『悪魔のゼロ』・・・パイロットは天才的な操縦技術を持ちながらも、
生還することに執着し「臆病者」と呼ばれた男・宮部久蔵。
彼は最期に、何を残そうとしたのか・・・？

この空はきっと、君の未来に続いている。

原作 百田尚樹「永遠の０」（太田出版）/ 監督 山崎貴 / 脚本 山崎貴・林民夫 / 音楽 佐藤直紀 / キャスト 岡田准一 三浦春馬 井上真央
公開２０１３年 / 制作 ＲＯＢＯＴ / 配給 東宝

（Ｃ）２０１３「永遠の０」製作委員会

【ストーリー】

佐伯健太郎（26）は司法試験合格を目指していた。だが司法浪人が長く続き、本来の目的を見失っていた。――そんな折、祖母の葬儀の日に、今まで知らなかったある事実を知らされる。

それは、いままで祖父と思っていた賢一郎は自分とは血がつながっておらず、特攻で死んだ宮部久蔵という本当のおじいちゃんがいたという驚くべき内容だった。宮部は祖母にとって2番目の夫であり、宮部こそが最初の夫だったというのだ。乗り気がしなかった健太郎だが、姉の誘いによりわずかな手掛かりの中から宮部久蔵という人物を解き明かしていく。

だが、取材先で知り合った戦友たちから出てくる宮部評は「海軍一の臆病者」「お命大事」「帝国海軍の恥さらし」という酷いものだった。やる気をなくした健太郎だったが、最後の取材と決めたある日、「宮部は凄腕のパイロット」「何よりも家族を愛していた男」と話す戦友と出会う。単なる臆病者ではなかった……！健太郎は祖父のことをもっと知りたいと願うようになる。

健太郎にとって、この取材はいつしか自身のルーツを探る旅となってゆく。そして、宮部の足跡を辿ることで、自分と同じ若い人間たちが、戦争という渦に飲み込まれながらも、懸命に生きていたことを初めて肌で感じるのだった。

宮部という人物像がどんどん健太郎の目の前に立ち現われていく。そして健太郎は「妻と娘のためにそれほど「生きて帰ること」に執着した男が、なぜ特攻で命を落とす運命をたどったのか」という究極の謎に向かってゆく。やがて、その謎の先に明かされる、驚愕の事実。そこには果たして何があるのか――？

【編集スタッフ後記】

終戦当時の記憶や遺産が薄れていくなか語り継ぐべき真実を掘り下げることも大事な作業であることをつくづく実感するが、こんなに多くの遺産が眠っている大隅がいかに当時の重要拠点になっていたかを想像するきっかけになった。

大隅半島が映画「永遠の０」のロケ地候補にあがっていたことを知る人は少ない。原作の中、２回ほど取り上げられるシーンの中で串良飛行基地と海上自衛隊鹿屋航空基地史料館がでてくる。幸いにして鹿児島県奄美大島で南の島のイメージでのロケがされたとのことで鹿児島県の離島の特色を生かせたことだろう。

戦争を通して「家族の絆」を描いた百田尚樹さんの原作本は、昨年度アマゾンでの年間ベストセラーになり映画でも前評判が高いが、戦後生まれの私たちには当時の状況を知る由もない。今できることは当時の眠れる遺産をどのような活用をすればいいかを将来にわたった展望のもとにみんなで検討すること。

大隅地域の特色、鹿児島県の特色を歴史、文化、食を通してアピールしていくことで交流人口増加、定住促進にもつながっていくと思う。

戦後、歴史の評価は70年後にと言われたが、今になっても評価するには重すぎる。私たちにできることは後世に伝えること。

（ほり）

発行　編集　企画
特定非営利活動法人　湾岸こっち隊　理事長　楠原秀尉
〒899-7302　鹿児島県曽於郡大崎町神領2419番地
TEL　099-477-2400　FAX　099-477-2407
編集スタッフ　堀之内裕行（TEL 099-476-3611）
門倉恵介　尾上朋子　堀田徳隆
豊田教平　徳永美幸　松之段けい子
平山奈津子　河野精一　諸木大地
協力　かごしまの戦跡を探る会　八巻　聡　/　小島良章
デザイン
ＺＯ　ＣＲＥＡＴＩＯＮＳ
〒893-1605　鹿児島県鹿屋市串良町上小原4939-6
TEL / FAX 099-463-0137

鹿児島県大隅地域振興局業務委託　大隅の宝さがし＆宝づくり事業情報誌発行
平成２４年　発行部数　２万部　フリーペーパー（無料配布）

大隅のＦＭ放送は全局ネットワーク、インターネットでも聞くことができます。
ＦＭかのや 77.2ＭＨｚ　ＦＭきもつき 80.2ＭＨｚ　ＦＭ志布志 78.1ＭＨｚ　ＦＭたるみず 77.7ＭＨｚ

おおすみ東風隊（こっちたい） presents
みごろ、たべごろ、大隅こっち隊
毎週金曜日　おひる 12：30 から30分
再放送日　毎週木曜日よる 22:00 ～ 22:30　土曜日あさ 08:30 ～ 09:00

大隅の観光を中心に、旬のおいしいもの、歴史、ポイントなど見どころを話題に３０分間のトーク番組です。
リスナーの皆様からのお便り、リクエストなどお待ちしております。また、地域の情報もお寄せください。
番組に関するご意見、ご要望、リクエストなどは下記の事務局までお願いいたします。

FM 志布志
事務局　おおさき観光案内所
TEL 099-477-2400
FAX 099-477-2407
www.ohsumi.info
mail@ohsumi.info

志布志観光ガイド　TEL 080-6448-2010
おおさき観光案内所　TEL 099-477-2400
特定非営利活動法人
豊栄ひっとべ会　TEL 0994-63-2127